

淳熙年間における朱熹の広域講学

— 浙学呂祖儉との交渉を中心に —

市来 津由彦

- 一 はじめに— 呂祖謙の死とその波紋 —
- 二 朱熹・呂祖儉交渉の経緯
- 三 朱陳論争と呂祖儉
- （一） 呂門の陸学評価問題
- （二） 朱熹と陳亮とのはざま
- 四 呂祖儉の道学
- （一） 若年の呂祖儉における道学への関心
- （二） 淳熙中の朱熹・呂祖儉の道学論議
- 五 小結

一 はじめに— 呂祖謙の死とその波紋 —

朱熹（一一三〇～一二〇〇）の交遊者、門人集団のあり方は、朱熹の五十代に質的に大きな転機をむかえる。福建北部に活動の本拠地を置く朱熹は、その五十代のはじめに本拠地を離れて江東路南康軍の知事となり、またその知事としての飢饉救済の行政手腕が認められ、同じく飢饉救済のために浙東提挙に任用されるという社会活動

を行う。そのことによつてその名と學術とが士人層に認知され、福建外から彼のもとにやつてきて学ぶことを志す者が多く出はじめるのである。

この外任ということに加え、その交遊者、門人集団のあり方にこゝうした変化が起きたことには、朱熹四十代における道学振興運動の盟友ともいえる張栻（一一三三～一一八〇）、呂祖謙（一一三七～一一八二）が朱熹のこの五十代のはじめの五十一歳、五十二歳のときに相次いでなくなったという事情が大きく関わる。

すなわち、朱熹が未「定論」期にこの張栻を通して湖南の胡宏ら胡氏の学を吸収し、それを踏み台にしていわゆる「定論」の立場に達し、そこから自身の旧説でもある胡氏の学を批判したことはよく知られている。張栻はこの過程で朱熹にとつてきわめて重要な役割を果たした人物であった。ただしそのことは彼の個人的思想形成の問題である。道学振興運動という社会的視点からみた場合により大きな意味を持つのは、後者、呂祖謙の死とその波紋である。以前にふれたことがあるが、呂祖謙は、隆興の和議以後における宋金の小康期間の初期に王朝の科挙システムの中で道学の振興につとめ、太

学の学官また科挙の試験官として陳傳良ら永嘉の士、永康の陳亮、朱熹、陸氏兄弟、浙東陸門ら道学系の思想、学説を唱える各地の同世代の士人と親しみ、彼らの結節点、相互交渉の窓口となった人である〔①〕。そうした仲立ちの役割を果たした人物が思想流通の舞台から去り、道学系中心思想家達は仲介者を介在させず直接に交渉せざるをえなくなる。それとともにそれぞれの中心思想家達は他の中心思想家との相違を鮮明化させていく。そして道学系思想振興のゆるやかな連合として存した乾道から淳熙年間前半の士大夫思潮が、道学系思想各学説へと分化し、学派的集団の形成へと展開していく。

このような事態をもう少し眺めてみると、当時の科挙システム文化の展開度により中央、周縁地域で思想文化環境に相違はあるが、まず各中心思想家は自身の居住地における狭い意味の地域内の地縁、学縁による士人同士で講学するという姿がある。これを地域講学と呼ぶとすると、活動の本拠地離れたその中心思想家同士が科挙システムを媒介にして（主としてはじめは臨安で）相互に知り合い、書簡によるものも含めて講論し合うのを筆者は広域講学と呼ぶこととする。その広域レベルの講学に参加する人は、その情報を自身の周辺の地域講学グループに還元し、それを承けて各地域講学グループ内の士人は眼前にいる中心思想家とのみではなく、他の中心思想家にも関心を懐き交渉するようになっていく。このような状況がここで形成されるのである〔②〕。淳熙年間後半以降にうかがいがつてくる陳亮の事功説の提唱や朱熹と陸氏兄弟の論争などはまさにこのあらわれである。呂祖謙の死は、こうした思想流通環境に関わる波紋を引き起こしていく。

そして、もと結節点となっていたこの呂祖謙の学を継ぐ人として、その弟の呂祖儉がいた。兄祖謙の死後のこの時期、朱熹はこの呂祖儉を代表とする呂氏の学の門流を批判する。そこには、婺州の金華で活動する呂祖謙とその隣の永康県出身の陳亮というように本拠地が近くまた思想的にも呂祖謙に親近していた陳亮が唱えた事功の説に、祖謙死後の呂氏の門流が取り込まれることへの警戒の意味があった。この問題については王懋竑『朱子年譜』が淳熙一年の項で「辨浙学」としてとりあげ、関連する朱熹資料を列挙している。またこの時期の諸問題について東景南氏は近年の大著『朱子大伝』（福建教育出版社、一九九二年。以下、東景南書とも略記）において、朱熹の陳亮批判を主たる論述対象としながら、その陳亮批判と連動する呂氏の学関係者らに対する朱熹の屈折した論評を、当時臨安に出ていた陸九淵の影響に対する配慮もあるとみてこれも絡めて詳細に論じる（第十四章「全方位的文化論戦」）。諸問題の連動の中で語る東氏の論述は、一方で陳亮説を批判しつつ、他方で朱熹にとって次第に警戒すべき存在とみえてきた陸学をもにらみながら、呂祖儉らがどちらにも傾斜しないように牽制するという、多方面に配慮する妙味に朱熹の営みを見出す。すべてを連関態としてみていくという点においてその論述は正当な捉え方である。ただしこの東氏の書は、陳亮と陸学との間で朱熹が呂祖儉を牽制するという構図の中で呂祖儉を捉え、かつ「大伝」として朱熹を中心化する視点から描写するために、祖儉の主意に対してはいわば外から判断をくだす記述になっている。ところが朱陳論争問題で朱熹に批判はされても、呂祖儉は朱陳論争以後も晩年まで朱熹と学術論争を続ける。そこには朱熹

説に対し祖儉が深い関心を抱いていることが想定でき、朱熹もその関心を受け入れているゆえに交渉が続くという側面があることに留意する必要がある。朱熹を中心化・特権化させるのではなくして、南宋半ばの士大夫思想交渉の理解を企図するという視点に立った場合、朱熹説に対する呂祖儉のこの関心については兄祖謙の生前からの朱熹・祖謙交渉の流れの中で捉え、また陳亮説への祖儉の傾斜に対する朱熹の批評と朱熹自説への祖儉の関心の受納との関係についても、祖儉の文脈に沿って検討することが必要なのではないか。

本稿は、呂祖謙の死を、南宋半ばにおける道学系士大夫思想交流の活発化を引き起こした要因とみなし、陳亮に対する朱熹の批判もやはり呂祖謙の死の波紋とみて、その立場からその陳亮批判論争期における呂氏の門流と朱熹との思想交渉を、呂氏の学側の心理がうかがえる呂祖儉関係朱熹資料を通して追跡し、併せて五十代の朱熹における交遊者、門人との関わりの方質的变化について考察しようというものである。

二 朱熹・呂祖儉交渉の経緯

行論の前提として、朱熹と呂祖儉との交渉の経緯について述べておきたい。

呂祖儉、字は子約、晩年の号は大愚。号名は慶元の偽学の禁により江西の吉州、筠州に流謫され、筠州高安の大愚寺に寄居したことによる。『宋史』卷四五五（忠義伝一〇）、『宋元学案』卷五一。呂祖謙の弟であり、いうまでもなく宋代の名族東萊の呂氏の一員である。

没年は慶元四年（一一九八）七月。生年は不詳。祖儉本伝に、「業を祖謙に受くること諸生の如し」とみえる。兄呂祖謙よりも十歳位は若い。とする。朱熹と呂祖謙との年齢差は七歳であり、祖儉はおそらくは朱熹より十五〜二十歳ほど若い。彼は淳熙八年（一一八一）の兄祖謙の死のときまでは官界関係資料には出てこない。科擧は受けず蔭により任官し、淳熙九年に浙東明州の監米倉となる。明州では陸氏兄弟につながる浙東路陸門の人士と交流。そのうち本伝によると、衢州「法曹」、籍田令、司農簿、台州通判、太府寺丞を歴任。

慶元元年（一一九五）年、趙汝愚の罷免に抗議して韓侂胄ににらまれて韶州安置となり、さらに嶺南の新州に移す決定が下されようとするところで、名流の子孫を殺すことになる。後がまずいという理由から韶州への南行中に戻され、江西の吉州、次いで筠州に置かれた。その筠州でおそらく五十代の前半の年齢で死去した。別集として『大愚叟集』十一卷（『直齋書録解題』、『宋史』本伝は『大愚集』十一卷）があつたが現存しない。また墓誌銘等、呂祖儉に関する一次資料は希薄である^③。朱熹には彼宛の書簡が多数残り、『朱文公文集』（以下、『朱集』と略記）卷四七、八に四十九通、『朱集別集』卷一に一通が収録される。中には呂祖儉の質問を併載するものもある。呂祖儉自身が記述した資料がほとんど残っていない現状では、彼の内面をうかがうにはこの朱熹資料に頼らざるを得ない。

彼と朱熹との関わりについていうと、『朱集』内でその名が定期的に初出するのは、朱熹三十九、四十歳頃の書簡においてである（卷三九「答范伯崇」第五書）。兄呂祖謙宛の朱熹書簡は朱熹四十歳以降に多くなるが、四十四歳の書簡までこの弟祖儉には言及がない。また

弟祖儉宛書簡で年次が確定できるものも朱熹四十四歳のものからである。その朱熹・呂祖儉交渉の経過をあらわす呂祖儉宛の朱熹書簡の年次のおよそを配列した略年表を、王懋竑『朱子年譜』、陳来『朱子書信編年考証』（上海人民出版社、一九八九年。以下、陳来書とも略記）の考証等を参照しつつ、別表のように作成した（次頁、表Ⅰ「呂祖儉・朱熹交渉略年表」）。なお、書簡通数区分けは『朱子大全簡疑輯補』に拠る。ただし書簡番号は卷四七、八を通して連続番号として記入した。

さてこの表をみると、呂祖儉宛朱熹書簡は時期的に次の三群に分けられる。

I、呂祖謙在世期：第二一書まで。淳熙元年（一一七四）年に集中。

この年に呂祖儉が朱熹に提起した「心説」という文章をめぐって、呂祖儉および朱熹が居住する福建の講学仲間の間で書簡により議論が交わされる。集中しているものは主としてこの議論に関わる書簡であり、道学思想に対する祖儉の原型的関心がうかがえる（第四節、後述）。右に述べたおよその生年の推測からすると、祖儉は二十代後半ということになる⁽⁴⁾。なお第Ⅱ群の伏線となることだが、乾道六年（一一七〇）、兄呂祖謙が太学博士となった時に陳亮が太学に在籍しており、祖謙はこの陳亮と親しく交際し、陳亮はしばらくは祖謙に導かれて「道学」を学びつつ、同時にその道学に対抗する視座を模索する。またこの呂祖謙との関係から祖謙を仲介して陳亮は朱熹とも交渉するようになる。弟祖儉ももとよりこの祖謙・陳亮の交渉の傍らにおり、その人と為りや学説を聞いていたはずである。

II、明州赴任期とそれ以後：第三四書まで⁽⁵⁾。先述のように呂祖儉は兄の死後に監米倉として浙東の明州に赴任する。その地で兄にゆかりの士人らと交遊。また浙東陸門とも交流する。兄の学の延長で「道学」を志向する祖儉は、兄から受け継ぐ学に加え、浙東陸門が説く陸学や陳亮の事功説、そして朱熹の説という三者の間で心が揺れ動く。兄呂祖謙の死の波紋がここに現れている。本稿は次節以下、中心的にはこの時期の朱熹と呂祖儉との議論に関わる問題について検討する。なお従来、呂祖儉は淳熙一四年まで明州にいたとみられていたが、本稿ではいくつかの理由からそれ以前に呂祖儉が明州の差遣を離任していると考え、一連のものとみられる第二九〇三三書を、彼が明州ではなくおそらく婺州に戻って講学したことを語る資料とみる⁽⁶⁾。本稿ではこの理解のもとに、朱熹・呂祖儉交渉の諸問題を考えていきたい。

III、偽学の禁の中で：第三五書以降⁽⁷⁾。紹熙五年（一一九四）寧宗即位後の趙汝愚と韓侂胄との確執の中で、朱熹は趙汝愚の後盾により十月には一端は寧宗の侍講となるがすぐに離任、建陽に戻る。そののち先にふれたように翌慶元元年に趙汝愚が罷免され、四月に呂祖儉は上疏し、韶州配流となる。命に従い江西を南行中に吉州に送られることになり、そののち筠州高安に移された。第三七書までは流謫以前、第二八書以降が配流中のものとみられる。この困難な事態の中で呂祖儉は道学の修養法により心を保持することに苦心を持ち⁽⁸⁾、心の鍛え方について自身が抱いていた思考と朱熹の説とのすりあわせを行おうとする。

呂祖儉宛の朱熹書簡は、時期からみて以上の三つの群に分けるこ

「表 I」 呂祖俊・朱熹交渉略年表

歳	朱熹	呂祖俊	朱熹と呂祖俊の間	呂祖俊の跡	備考
64丁卯	朱熹の生誕	呂祖俊の生誕			
65戊子	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
66己丑	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
67庚寅	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
68辛卯	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
69壬辰	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
70癸巳	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
71甲午	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
72乙未	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
73丙申	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
74丁酉	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
75戊戌	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
76己亥	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
77庚子	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
78辛丑	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
79壬寅	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
80癸卯	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
81甲辰	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
82乙巳	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
83丙午	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
84丁未	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
85戊申	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
86己酉	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
87庚戌	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
88辛亥	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
89壬寅	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
90癸卯	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
91甲辰	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
92乙巳	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
93丙午	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
94丁未	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
95戊申	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
96己酉	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
97庚戌	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
98辛亥	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
99壬寅	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			
100癸卯	朱熹の幼少	呂祖俊の幼少			

とができる。ただし呂祖謙の死の波紋という問題から離れることと紙幅の関係とから、第三群の問題に関しては別稿を予定している。本稿は主として第二群の問題についてとりあげることとしたい。

三 朱陳論争と呂祖俊

兄呂祖謙に対する期の喪のために赴任を延期していた弟祖俊は、淳熙九年（一一八二）冬に明州に行き、この後数年を明州ですごす。この時期はちょうど朱熹・陳亮の論争時期と重なり、特に淳熙一〇〜一二が焦点となる。先掲の表 I 参照。この時期の関連朱熹書簡の年次は、一、陳亮『龍川文集』目録に陳亮の朱熹宛書簡の差出し年と季節が記述されており、この年次がまず確定する。二、これにあわせて朱陳論争関係の陳亮宛朱熹書簡のそれぞれの年次が自動的にほぼ確定する。そして三、それに合わせてその朱陳論争の経緯に関連する呂祖俊その他の人宛ての朱熹書簡の年次がほぼきまる。そして前節の呂祖俊宛書簡群区分Ⅱによると、祖俊宛朱熹書簡第二九書以下は、祖俊の明州赴任期の問題を考察する材料としては二次的なものということになる。

以下、東景南書の論述もあるので詳細はそちらに譲るが、朱熹書簡にみられる朱熹の呂祖俊批判を本稿の必要の限りで追い、その上で朱熹書簡にあらわれた呂祖俊の道学を瞥見したい。ただし先に述べたように、晩年の論議は別稿で扱い、本稿では淳熙年間の朱陳論争時期とその周辺に記述を絞る。

(一) 呂門の陸学評価問題

さて、呂祖俊宛朱熹書簡で陳亮説批判が表だって登場するのは第二三書だが、その前の第二二書の次の記述は、その陳亮説批判が朱熹にとっては陸学と連動する問題であったことをうかがわせる。

所論の江西の（陸学の）補足解説は市来。以下同じ）弊は、切に其の病に中る。然れども前書に奉告せし者は、其の人を論ずるに非ざるなり。乃ち吾が学に自ら未だ至らざる有りて、要は彼の善を取りて以て自ら益するに在るを論ずるのみ。彼に全く本原根柢無しと謂えば、則ち未だ知らず。吾の恃みて以て本原根柢と為す所の者は、果して何くに在りや。幸いに更に之を思い、復た以て教えられよ。

（全文）

ここから逆に推測すると、呂祖俊は「陸学には本原根柢がない」という意味のことを朱熹に論じたとみられる。その祖俊の言い方に対し朱熹は、「本原根柢」につながるものを相対的には陸学の方にみてとる。とすると呂祖俊が言った「本原根柢」は朱熹がみているものとは異なることになる。そして第二三書には、「子約の所謂る經史貫通の妙に於けるが若きは、則ち未だ得ること有らざるなり。」という一文がある。やはりこの言を書簡往復の「問」いかけに対する結果としての「答」とみて、その言を引き出す呂祖俊の「問」いかけとしての論を逆に推測すると、朱熹にとって批判すべき思考として、祖俊が「經史貫通の妙」ということを言ったと考えられる。しかも第二三でその語は、經と史とを対等にみるのではなく史的観点から經を読み解くという意味で「貫通」というと朱熹には受け取

られている。この語が第二二書で問題となった「本原根柢」と連動しているとする、呂祖儉がいう「本原根柢」は、それを「史」学に関わらせるものであり、朱熹はそれを倫理の学としての「経」学の側から切り返したということになる。ただし第二二書と二三書が連動するという確認はここからだけではとれない。しかし以下のような状況証拠的材料がいくつかあることから、東景南書また陳来書の理解と同じく、筆者もやはりこの第二二書を明州赴任後のごく初期のものとみたい。

すなわち、兄呂祖謙の母が紹興の曾幾の娘であるため（祖儉本人の母は未確認）、生前の祖謙は紹興を訪れ、その際にはこの地の人士と交流する間柄であり、つまりは弟祖儉にとって本拠地婺州金華を離れるとはいえず、紹興、明州地方は地縁や学縁がある、広い意味では自身のネットワークの内側の地域であった。またちょうど淳熙九年秋より陸学の陸九淵は太学の学官である国子正として臨安に滞在し、彼は明州出身の旧知の楊簡、袁燮ら浙東陸門と旧交を暖めあっていた。前者について全祖望は、もと『永樂大典』残本に残った呂祖儉『大愚集』の「遊候濤山記」により、おそらく翌一〇年の四月に紹興と明州在住の呂祖謙兄弟ゆかりの人々が集まったことを語る（『鮎埼亭集外編』巻四四「奉臨川先生帖子」五）所引）。そこに名が挙げられているのは、潘友端・字端叔、謝暢、康文虎・字炳道兄弟、王鉛・字季和、李某・字叔潤、方某・字居敬、史彌堅・字開叔、楊某・字希度、舒琪・字元英ら、呂祖謙兄弟の縁者および地域の名士といえる人々である。と同時に呂祖儉は、浙東陸門の中ではちょうどそのとき明州にいた沈煥とも交流する（同「奉臨川先生帖子」五）

所引、呂祖儉「東王希和」詩）。沈煥は陸氏兄弟の学を親しく語り、また祖儉は兄ゆかりの人々にその話を語ったであろう。そしてどの段階から抱いていた評価かは不明だが、呂祖謙ゆかりの人々には陸氏の学が禪に向かう弊害を持つものにみえたらしい。そうした理解は朱熹とも共通する。呂祖謙ゆかりでかつ朱熹とも親交がある士人は、書簡でそうした見解を朱熹に語る。こうした背景とすそ野があつて、呂祖儉宛朱熹第二二書とその前提に想定される朱熹宛呂祖儉書簡の往復がなされている。呂祖謙に学んだ処州麗水出身の周介、字叔勤（またの字公勤）宛朱熹書簡に、

応之（陸九淵、のちには朱熹とも親交を持った紹興の士人石宗昭の字）甚はだ恨むらくは未だ相見ゆるを得ざるを。其の為学の規模次第は如何。近来 呂陸の門人互いに相い排斥す。此れ各おの見る所の偏に徇いて、天下の心を公にして以て天下の理を觀る能わず。甚はだ人の意に満たざるを覚ゆ。応之は蓋し嘗て両家に学びしならん。知らず其の此に於いて看得るや果して如何。

『朱集』巻五四「答周叔謹」第一書。部分）とみえる一節は、こうした関わりの輪があつたことを示唆する〔⑨〕。 「呂陸の門人互いに相い排斥す」と朱熹にはみえたこのような状態が淳熙八年（一一八二）の呂祖謙の死以後でかつ淳熙一一年以前であることは、呂祖謙兄弟、また陸氏兄弟とも親交があり、かつ心理的に朱熹に近い知人である劉清之（一一三九〜八九）〔⑩〕宛ての淳熙一二年二月のものともみられる（陳来書、二二七頁）朱熹書簡第一一書の次の一節から推定できる。

近年 道学は外面に俗人に攻撃せられ、裏面に吾が党に作壊せ

らる。婺州は伯恭の死して後より、百怪都て出ず。子約の如きに至りては別に一般の差異する底の話を説き、全然是れ孔孟の規模ならず、却て管商の見識を做し、人をして駭歎せしむ。然れども亦た是れ伯恭自ら些さかの泥を拖き水を帯ぶる有りて、致し得て此くの如し。又た人をして追恨せしむるなり。子静は一味に是れ禪にして、却て許多の功利術数無く、目下に学者の身心を収斂し得て、力無しと為さず。然れども其の下稍や据依する所無く、恐らくは亦た未だ事を害うを免れざらん。

『朱集』卷三五。部分)

俗人の攻撃は、浙東提挙としての飢饉救済のための厳しい措置とそこから引き出された唐仲友弾劾に関する政府内および地域の反感、波紋を言おう。それと対比的に朱熹は呂祖儉らを「吾が党」とまづはみなす。ところが兄祖謙の死後、祖謙の影響下にあつた人々が「管(仲)商(鞅)の見識」をなし(朱熹が考える)道学から離れると朱熹にはみえた。陸九淵を引き合いに出しつつ、朱熹はそのことへの不満を述べる。兄祖謙にも責任があるという言い方は、『朱子語類』卷一二二にみられる祖謙死後の朱熹の呂祖謙評価の基礎をつくっていくものとなる。そしてぐらつく「吾が党」の象徴として呂祖儉をあげるのである。これが淳熙一二年二月の言葉であるから、この言に対応する事態はその前年あるいは前々年の事ということになる。この書簡における呂氏の学と陸学との関わりに関する前提的理解は、比較して一目瞭然のように、先の呂祖儉宛朱熹書簡第二二書とほぼ同じである。これらの材料からして、やはりこの第二二書で語られていた問題は、呂祖儉の明州赴任の頃のものともみてよいで

あろう。

なお付け加えておくと、道学が「外面被俗人攻撃」という状況があるためか、呂祖謙の死まもなくのこの時期、陸学に対して朱熹は、批判的視点を抱きながらも、自己の立場と陸学の長所との両立論を陸門及び陸学に関心を持つ者に説くという微妙な対応をとっている。『朱集』卷四九「答滕徳章」第四書、卷五四「答項平甫」第一書、『別集』卷三「孫季和」第三書等参照。その言い方と呂門に対し陸学の長所を認めるという言い方とは並行するものであつた。

(二) 朱熹と陳亮とのほざまで

さて、呂氏兄弟ゆかりの人々の陸門に対する反感的評価という、朱熹が陳亮説批判を語るときの前提を述べたが、以下、事功を説く陳亮との相関の中での呂祖儉とその呂祖儉に対する朱熹の対応の経緯についてみてみよう。ただし朱陳論争の詳しい内容については、先行研究も多くあるのでそちらに譲りたく、ここでは祖儉に対する朱熹の対応をみる限りで両者の交渉経過にふれるにとどめる(⑩)。

すなわち、淳熙一〇年秋以前、おそらくは前年に会面したおりに陳亮は朱熹に十の「論」と二つの「策」を提示した。それは「事功」という、いわば伝統儒学の動機主義に対し結果評価主義の視点を導入して夏殷周と漢唐を評価し、道徳論に偏ると陳亮の眼に映つた世儒の見解を修正しようとするものであつた。結果主義は動機主義にはあわないとして朱熹はこれを批判しようとする(『朱集』卷三六「答陳同甫」三。東景南書五六六頁)。その後、淳熙一一年一〜五月に陳亮は訴訟沙汰で一時入獄し、その出獄時に朱熹は見舞いにかこつけて

陳亮に説の撤回を求める（『朱集』卷三六「答陳同甫」四）。これに対しこの年の秋の書簡で陳亮は反論し（『龍川先生文集』卷二〇）、朱熹もこれに反論する（『朱集』卷三六「答陳同甫」五）。ただしこの書簡は陳亮の論点に沿った反論で、朱熹自身の自説の開陳は翌淳熙一二年春になる（『朱集』卷三六「答陳同甫」八）。これをめぐるやりとりがあつて両者の論が対峙し、その後は譲歩がない言い合いになつて論争は終息するという経過をたどる。

そして朱熹は、呂祖儉の言葉に陳亮説の影響をみてとり、陳亮説に傾かないように一面では祖儉を批判しつつ、他面では彼が朱熹説から離れないようにという対応をとる。朱陳論争の経緯からみて淳熙一一、一二年、つまり表Iに記した呂祖儉宛書簡第二三〜二八書がこのことに関連する。そのうち淳熙一一年のものは第二三、二四書である。ただし陳亮の反論はその年の九月からであり、そのもととなつた朱熹の陳亮批判は四月もしくは五月のものである。第二三書は朱熹のその陳亮宛書簡とほぼ同時の春夏と考証されるもので（陳来書二〇頁）、その前提となる呂祖儉からの朱熹宛書簡はそれ以前に送られている。すなわち第二三、二四書は、陳亮が朱熹に大々的に反論する以前に書かれており、陳亮の反論を前提としてはいない。陳亮の十論二策を読み、また呂祖儉の書簡にその説が強く浮き出ているのをみて、朱熹がみる限りのその悪影響をくいとめるべく予防的に祖儉を批判したとみられる。

朱熹にとつての呂祖儉の問題点は、この第二三書に表明されている。朱熹は言う。

（呂祖儉殿あなたの）所謂「秦漢の天下を把持するは、智力に

由らざる者有り」とは、乃ち是れ（呂祖謙の墓がある婺州武義県の）明招堂上に陳同甫の説く底もとなり。平日正に疑う渠かれの此の論は未だ安からざるを。謂いわわざりき子約も亦た此の見を作し此の論を為すことを。大抵書を読むこと寛平正大なる者は、之を精ならざるに失すること多くして、精密詳審なる者は、又た局促姦巧の病有り。人の情偽は察せざるを得ざる者有りと云うと雖も、然れども此の意偏勝なれば、便ち自家の心術も亦た染まり得て好からざり了るを覚ゆ。近年此の風頗る盛んにして、純誠厚德の君子と雖も、亦た往往にして其の中に墮ちて自ら知らず。区区の常に窃かに之を憂えて、子約の之を為すを願わざる所以なり。子約何ぞ試みに論語・孟子・中庸・大学等の書を取りて之を読み、其の光明正大、簡易明白の氣象を觀みざるや。又た豈に此くの如きの狡猾切害の処有らんや。世路は險窄にして、已に言う可き無し。吾人の聖賢を学ぶ者、又た將に流れて功利変詐の習いに入らんとす。其の勢い一伝再伝を過ぎざるも、天下必ず其の禍を受くる者有りて、吾が道益ます以て振たむざらん。此れ細事に非ざるなり。子約之を思おもうや如何。（部分）

この引用の冒頭によれば、呂祖儉はこの朱熹書簡の前提となる朱熹宛書簡において、「秦漢の天下を把持するは、智力に由らざる者有り」という意味のことを論じたはずである。この論題は事功をどうみるかの出发点からの論点であり、朱熹には呂祖儉が陳亮の影響を受けてこの説に肩入れしていると映った。朱熹からすれば、經書は聖賢の生き方を学ぶ人生哲学が示されている普遍的書物である。しかし呂祖儉はそうは捉えず經書の成立やその内容を史的観点から状

況的な記述として読み込もうとするとみえた。そこから、先にみた「經史貫通の妙」などということを言い出す。それは聖賢の生き方があらわれたものという經書の立説の本旨を忘れるからであり、まずは四書を読んでここに帰らねばならない。朱熹はこう説き、經書を史的観点から読み込み、その言葉を状況的なもの還元することに強く警戒するのである。

淳熙一一年の夏秋と考証される(陳来書三二頁) 続く第二四書において、經書を史的観点から読み込むことへの朱熹の警戒は変わらない。むしろそれが中心的論点となっている。

大抵此の学は徳性を尊び放心を求むるを以て本と為して、聖賢の親切の訓えを講じて以て之を開明す。此れ要切の務めなり。

古今に通じ世変を考うるが若きは、則ち亦た力の至る所に随い、推広増益して以て補助と為すのみ。当に彼を以て重しと為して、反て凝定收斂の実を軽んじ、聖賢の親切の訓えを少くべからざれ。若し此くの如く説けば、則ち是れ学問の道は己に在らずして書に在り、經に在らずして史に在らん。(部分)

朱熹によれば、「史」に対する「經」の意義は、自身の外の書物を学ぶことに比較し「己」のために学ぶこととパレルであり、つまるところ「史」は「補助」の位置のものであり、主とはならないものなのであった。書簡内のこの文脈の前に、「前書の喩する所云々」「後書は又内を軽んじ外を重んずるの意有るを免れず」とあり、先の朱熹第二三書とこの第二四書との間に呂祖儉から二通の書簡が朱熹のもとに届いたらしいことがうかがえる。そこでの祖儉の論調が、第二三書の前提となる呂祖儉の朱熹宛書簡と基本的にはかわらず、

朱熹からみて「補助」であるべきはずの「史」にやはり傾くものであったために、このように「經」と「史」とを対峙させる言い方となったとみられる。

淳熙一二年になると、朱熹は陳亮に対し厳しく論難し、先にふれたように、朱陳両者の論点が出尽くして論議は膠着しつつ終息する。呂祖儉宛朱熹書簡の第二五、二六書はこの状況に対応する。第二五書では、陳亮に対する論弁を終息しようという意向を示して、陳亮宛の書簡を添付することを述べつつ、朱熹は次のように言う。

同父 後來又た爾たび書を得たり。己に底裏を尽くして之に答う。最後に只だ他に問えり。三代は甚に因りて做し得尽くせしや。漢唐は甚に因りて做し得尽くさざるや。見るに聖賢を頓著して面前に在れば、甚に因りて学ばずして必ず漢唐を論じ、他の好处を覓むるや、と。文中子を井せて一併に破除すること一上す。頗る痛快に著題するに似たり。未だ知らず 渠れ復た如何にして轉身の一路を做すや。(部分)

論及されている陳亮からの書簡は、第五、六書(『龍川先生文集』卷二〇)、朱熹の陳亮宛書簡は第九書(『朱集』卷三六)にあたる。呂祖儉が朱陳論争をもとより熟知していることを予想しつつの言い方であり、陳亮がもう反論できないと主観的には確信した論評である。

そして第二六書では、先立つ書簡三通が朱陳論争を冒頭の主題としていたのに対し論調がややかわり、呂祖儉が学問のしすぎでノイローゼ味の病に陥ったとの話を聞いたことを述べた後に、読書はすべて「心を存し性を養う」ことで、このことで病気になるはずはないが、「恐らくは又た只だ是れ太史公 崇りを為すのみ」と『史

記』の読み過ぎだと揶揄する。經学と史学の相違を冗談まじりで言う点に、經史両学の相違の論はすでに主張済みでそれを主題にはしないという論調の変化がうかがえる。第二七書も、「今ま自家一箇の身心の、安頓し去く処を知らずして、王を談じ覇を説き、經世の事業を將て別に一箇の伎倆の商量講究を作すは、亦た誤りならずや」と事功説批判にふれるが、それは、「本源を涵養して天理人欲の判を察す」る「日用の工夫」を論ずる文脈の中でのことであり、事功説それ自体の批判を中心主題とする意図のものではやはりない。朱熹にすれば、陳亮に対して自説を言い尽くし、陳亮から新たな論点が出てこない時点で陳亮を論破したとみなしたため、呂祖俊に対する敵しい言い方をしだいにさげすんでいったとみられる。

以上、呂祖俊宛朱熹書簡の第二二〜二七書の論調をみたが、そこからは、呂祖俊が淳熙一一、一二年に陳亮に同調してその事功説に肩入れし、それを朱熹がきつく批判した様相がうかがえる。しかしこの限りでは呂祖俊と朱熹とが対立的にもみえるが、よく考えるとこれは道学と事功説とを背反するもののように朱熹が表象するためである⁽¹⁰⁾。その後の経過をみると、朱熹の像から「呂祖俊は道学への関心を捨てて事功の説に趨った」というように単純に受けとることはできない。この時期の祖俊批判の前後のものも含めて呂祖俊宛の朱熹書簡を通覧すると、「道学」というものに対する呂祖俊の関心がきわめて強いことが朱熹の書簡からも感得できる。節をあらためてこの側面について検討してみよう。

四 呂祖俊の道学

(一) 若年の呂祖俊における道学への関心

まず朱陳論争以前における呂祖俊の道学への関心について確認しておきたい。若年期の呂祖俊の道学への関心内容をうかがわせるのが、第二節の表Iの説明でふれた、淳熙元年、朱熹四十五歳のときの「心説」問答関連の朱熹書簡群である。この「心説」問答については、陳来「論朱熹淳熙初年の心説之弁」（鍾彩鈞主編『国際朱子学会 議論文集（上册）』中央研究院、台北、一九九三年、所収）が論じ、また陳来論文と異なる文脈で筆者も取りあげたことがある（拙稿「中国南宋初における閩北士人の心性論と朱子学——朱熹と何鏞の交遊をてがかりとして——」、東北大学国際文化研究科論集、第二号、一九九四年）。議論の全体についてはこれらの論述を参照されたい。ここでは行論に必要な範囲内でふれることとする。

呂祖俊の「心説」は、『孟子』告子上篇「牛山之木」章に、「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其郷、惟心之謂与」、とある言葉をめぐり呂祖俊が「心」の捉え方について朱熹に質し、『朱集』卷四七「答呂子約」第一〇書所引）、それに朱熹が答えた論に触発されて再び呂祖俊が朱熹に書いて寄せた議論である。朱熹はその呂説をその時点での親しい交遊者たちに提示して見解を求めた。「心説」そのものは現存しない。これら一連の議論の課題は、陳来氏の検討をも踏まえていえば、孟子の「操存舎亡、出入無時」を心の不善の形態とみるのか、それとも善と不善の形態とみるのか。前者ならいかなる意味で不善なのか、不善でない心とはどのようなことな

のか。後者ならそのように善と不善とに変転きわまりないとすれば、心の安定はどう確保されるのか、というものであった。そして各自が理解する心の捉え方、それに基づく修養の実践観を開陳することが求められた。関連して、『尚書』大禹謨篇の「人心惟危、道心惟微」における「人心」「道心」という心のありようが、この「操存舍亡、出入無時」理解の前提となる各自の心の捉え方にどう対応するのかということが論じられた^⑩。

その一連の朱熹書簡中、呂祖儉宛書簡の第一〇、一二、一三、一六、一七書に朱熹の呂祖儉説評語がみえる。それらを見ると、呂祖儉はこの時期、胡氏湖南学の心性論に心引かれていたことがわかる。ここは胡氏湖南学の心性論について詳論する場ではないが簡略に述べると、胡氏湖南学の胡宏は、生生流動するこの万物の個々すべてにはそれぞれその奥にそのものたらしめる本体(体)としての形而上の「性」が具わるとする。形而上のその「性」は、形而下の現象(用)の世界に必ずあらわれ、またそれしかあらわれようはない。「物」はすべてそうしたあらわれとして存し、人についていえば「心」の働きがそのあらわれであり、主体は「性体心用」として存するとする。このとき「心」はその動も静もともに形而下とされ、動静窮まりないそのあらわれには善も不善もあるので、「性」の現れの端緒であるその善なる様態を察知し、その様態を保持すれば、「性」のあらわれとしての心を鍛えられるとして「察識端倪」ということを唱えた。この説は胡宏から朱熹の親友となる張栻に伝えられ、いわゆる「定論」以前の朱熹の未「定」説となった。そして朱熹書簡から推測される呂祖儉の思考は、この説を基礎としたもののように

みえるのである。

いま、多数の人々が絡み合う「心説」論議の経緯を追うことはさておき、呂祖儉説がうかがえる箇所を文脈ぬきで抜き出すと、例えば、祖儉宛朱熹書簡第一三書に、

蓋し之を操りて存すれば、則ち只だ此れ便ち是れ本体は別求を待たず。惟だ其の之を操ること久しくして且く熟し、自然に義理に安んじて妄動せざれば、則ち所謂の寂然なる者は、当に察識を待たずして自ら呈露せん。今ま乃ち此の頃刻の存するに於いて、遽かに察識を加えて、以て其の寂然なる者を求めんと欲すれば、則ち吾れは恐る。夫の寂然の体は、未だ必ずしも識る可からずして、所謂の察識なる者は、乃ち其の遷動を速やかにして、紛擾急迫の中に流るる所以なるを。

とみえる。朱熹は批判されるべきものとして「察識」を論じるが、朱熹がそのように説くのは、「欲於此頃刻之存、遽加察識、以求其寂然者」とここにまとめられるような説を、朱熹のこの書簡の前提となる朱熹宛書簡で呂祖儉が述べたためであろう。また祖儉宛第一七書には、「子約は又た『存亡出入は、皆な神明不測の妙なり』と謂いて、其の間に於いて真妄を区別すること、又た分明ならざるなり。」とみえ、朱熹と同じく福建北部に住む親しき講学相手の何籟(字叔京)宛朱熹書簡第二五書(『朱集』巻四〇)には、「子約又た其の出でて亡ぶる者を并せて真妄を分かたず、皆な神明不測の妙と為さんと欲す。」とある。これらは、動静また善不善に変転してきわまりないと「心」の特質を捉える「察識」説の立場に呂祖儉が立つて説いた言葉に対する論評とみられる。朱熹は自己の説として受け

入れていたこの「察識」説に難点を覚え、その難点を克服する視点を模索していわゆる「定論」を立て（『朱集』卷六七「已発未発説」）、そこから過去の自説でもあった「察識」説を批判しつつ、その四時代の全期間をかけて自己の立場を表象した。この「心説」問答で呂祖儉が批判されているのもそのためである。そして書簡の往復の中で朱熹が批判する理由を考えれば、とりもなおさず祖儉が「察識」説の立場に近い考えであったことが推測できる。

ここで重要なのは、この時期の朱熹のもつとも親しい講友であり、科挙文化システムの中で道学頭角に邁進する呂祖謙が、別稿で論じたことであるが、実はこの胡氏の心性説に引かれていたとみられることである⁽¹⁰⁾。呂祖儉はその呂祖謙の弟であり、先の紹介のようにその兄に学を授けられた。彼が兄と遠くない考え方を持っていたとしても当然である。

呂祖儉が胡氏の学に関心を寄せるのは、以上の呂祖儉宛第I群書簡の時期だけではない。朱陳論争後の後年の第III群書簡にもその痕跡がうかがえる。この時期の問題に関しては別稿で論じたいが、朱熹の第三六書冒頭に『胡子知言』への論究があるのは、その書簡の前提となる朱熹宛の祖儉書簡で『知言』が論じられていたからである。また問目応答となっている第三七書の朱熹所引祖儉書簡の、仏説をめぐる論議の一節で祖儉が、

又た「元とは善の長」の意思是、釈氏は既に元を識らず。類を絶ち群を離れ、寂滅を以て楽と為し、反て天地の心を指して幻妄と為し、四端苗裔を將て遏絶閉塞して其の流行を容れず。儒者の若きは則ち此の発処に於いて認取せんと要するなり。

と述べるが、「此の発処に於いて認取す」という表現も「察識」説の言い方に類似し、祖儉がその学の基礎に胡氏の学を受け入れていたことを思わせるものである。

以上のいくつかの材料からすると、呂祖儉が青年期、さらに壮年期まで胡氏の学を強く意識しつつ道学というものを受けとめていたということが推察できるのである。

(二) 淳熙中の朱熹・呂祖儉の道学論議

呂祖謙の死後、その弟祖儉は陳亮説に傾き、いったいどうしたのかと朱熹には映った。特に淳熙一年の書簡がその気分をあらわしていた。しかし陳亮との論争が終息していく翌淳熙一二年になると、祖儉に対する朱熹の評価がいささか変化する。それは祖儉宛書簡内の陳亮批判の論調にもあらわれていたが、より客観的にそのことをうかがわせるものとして、この年七月（『朱集』原注）の劉清之宛朱熹書簡第一二書がある。そこには次のような言葉がみえる。

伯恭は恙無き時は史学を愛説す。身後は後生の輩に糊塗して一般の悪口小家の議論を説出せられ、王を賤しみ覇を尊び、利を謀り功を計り、更に聴く可からず。子約は脚を立つること住まらずして、亦た「吾が兄蓋し嘗て之を言う」と曰うと爾か云う。中間に極力之を排するを免れず。今ま幸いに少しく定まる。

（『朱集』第三五。部分）

「足下がぐらついている（立脚不住）」とは言うが、ぐらつきだけを取出すと主意を誤る。その文脈の落ち着き先は、「ぐらついていたので言わざるを得なかったが、今ま幸いに少しく定まる」という所

にある。先に、この年二月の劉清之宛書簡第一一書の、「まことに嘆かわしい」という意味の言葉を引き、それからの約半年で

呂祖儉に対する印象は異なってきた。ではなぜそう映るようになったのか。そこでこの前後の呂祖儉宛書簡を再度振り返ると、第I群の第二一書までは、經書または論語、孟子など經書に準ずる書物に典故がある論題を宋の当時の現代意識でもって道学の視点から討議する言葉が多く存することに気づく。これに対し朱陳論争期前半の淳熙一一年の第二三、二四書は、經書また論・孟の論題を道学の視点から論議する部分はほとんどなく、陳亮説排除の言葉が主である。ところが淳熙一二年の第二五、二六書になると、そこには前項でみたように陳亮説を警戒する言葉がまずはあるのだが、各書簡の後半では道学主題の議論が復活しており、そこでの朱熹の評価には祖儉に対する好意的なニュアンスが含まれているのがみてとれるのである。以下、この第II群第二五書以降の道学論議をみてみよう。

先にこの第二五書でも陳亮批判が続いていることにふれたが、その批判の後に、「兩卷の説、今ま亦た紙を易うる能わず」として、以下に「仁」の捉え方その他の道学論議が始まる。「兩卷の説」はこの書簡の陳亮批判の前に、「兩卷の所論は、皆な精義なるも、其の間に亦た鄙意に未だ合わざる處有り。之を別紙に具す。幸いに之を思え」とあり、呂祖儉が送ってきた、おそらくは兩卷にわたる長い問目の議論を指す。はじめ別紙で答えようとしたが何らかの事情で、書簡本文に続けざるを得なくなった模様である。やや長くなるが、これらの論題とそこで言われた朱熹の言葉から呂祖儉がどういうことを述べたと予想されるのかについて箇条書きに列挙してみよう。

う。

- 1・「仁」の語に関する呂祖儉説への批評。「仁の字は固より専ら発用を以て言う可からず。然れども却て須^{かま}ず此れ是の箇の能く発用する底の道理を識得して始めて得たり」と朱熹は言う。仁と愛を体と用とに分けて配当する程子以来の説明方式に関する議論である。朱熹のこの論評からすると、祖儉は「体」に片寄せた説を述べたものとみられる。
- 2・『孟子』告子上篇の「平旦の氣」に関する祖儉説への批評。祖儉が比喩を用いて解釈を述べたのに対し、「甚だしくは相い似ず」と否定的な感想を朱熹は述べる。
- 3・『孟子』尽心下篇の「合して之を言う」に関する祖儉説に対する論評。朱熹は不十分とする。
- 4・朱熹のおそらくは「仁説」を敷衍した祖儉説に対する朱熹の批評。「今ま『性の徳、愛の本』の六字を改めて『心の徳、善の本にして、天地万物は皆な吾が体なり』と為さんと欲す」という語からすると、祖儉は「仁」について、「心之徳、善之本、而天地万物皆吾体也」と言ったということになる。
- 5・『孟子』告子上篇の「放心を求む」と『論語』顔淵篇の「克己復礼」との相関に関する祖儉説への批評。朱熹は「心を放却すれば、即ち視聽言動は皆非礼なり、非礼にして視聽言動するは、即ち是れ心を放却するなり。此の處は更に兩節と作す容^{ゆる}かず」と言い、両者は一体の現象とみる。祖儉説は両者を分けるものと朱熹には映ったらしい。
- 6・『孟子』公孫丑上篇の「浩然の氣、養氣、集義」に関する論。

文脈解説の中で朱熹は「然れども此の章の意は、則ち未だ夫の敬の字に及ばざるなり」と言うことからすると、この章と程子の「敬」説との関係を呂祖儉は話題としたらしい。次いで『易』の「寂然不動、感而遂通天下之故」は著卦のことで、「初めより心の為めにして発せずして、遂に以て性を言う可からざるなり。五峯の議論は、此くの似く拘滞する処多し」という語がみえることからすると、祖儉は胡宏（五峯）説を持ち出して説いたと思われる。ここにも彼が胡氏の学に傾いていた痕跡がうかがえる。

7・「孝悌」を「へりくだる」という心術として祖儉が解釈してきたのに対する、それでは本意を見失うという批判。

8・『論語』公冶長篇の「未知焉得仁」の解釈をめぐる論評。祖儉の句読の切り方の不可なるを言い、また「程子の所謂の仁とは天下の公、善の本なりとは、止だ是れ仁の字を賛嘆するの言にして、是れ字義を直解するに非ず」と言うので、程子説を用いて祖儉は論を立てたとみられる。

9・『論語』泰伯篇の「正顔色斯近信矣」をめぐる論。「亦た来示の注中に云う所の如きに非ず」と言うことからすると、祖儉が提示した理解は朱熹の意にはまったく合わなかったらしい。

10・『孟子』尽心上篇の「所過者化」をめぐる論。程子説があることを指摘して「必ずしも更に他の説を為さざるに似たり」ということからすると、これについても祖儉説は朱熹の意に合わなかったらしい。

以上が呂祖儉宛朱熹書簡第二五書で論究されている、『孟子』『論

語』の語句をめぐる道学論議の諸問題である。煩をいとわず示したのは、呂祖謙ゆかりの浙学の人士が陳亮説に傾くことを警戒する論と同じ書簡中に書かれていることが重要だとみるからである。論孟解釈をめぐる批判の言葉が続くが、こうした道学論議をすること自体について朱熹が受け入れるという朱熹への信頼感が呂祖儉の心に前提としてなければ論議は成り立たない。二人の関わりの基底にあるのはこのことである。このことを見落としてはなるまい。書簡前半の陳亮説への警戒の論もこうした前提を踏まえての表出であり、批判はしても朱熹は祖儉を心理的に拒否はしていないとみられるのである。

続く第二六書も、前半は浙学人士の論調に対し陳亮説への警戒感をかぶせて論評した後、道学論議を若干おこなう。それは、第二五書の朱熹の右にあげた論評を承けて、いくつかの論点に対して呂祖儉が再度、自説を送ってきたのに対する論評である。はじめに「仁の字の説は」と見出しをあげて、「所謂の祗だ発用の端に就きて言えば、則ち仁の本体を見るに由無しとは、只だ此の一句便ち是れ病根なり」と言う。呂祖儉に胡宏説の影響がみられることを想定すると、ここに予測される祖儉説は胡宏説と逆のことを言うかのようにだが、これは右にみた第二五書の1の論評を承けて朱熹説を組み込んだ説を祖儉が提示したためにこう言ったものとみられる。次の「克己復礼」論評は第二五書の5に、「浩然の氣」論は6に、「凡そ易を言う者云々」も6の「寂然不動」理解に、「曾子 孟敬子に告ぐるの三句」云々は9に、「其の仁を知らずの説」は8に対応する。その内容をここに一々はあげないが、この第二六書における『論語』

『孟子』論議は、第二五書を受け取った祖儉が朱熹の意見を組み込んで自説を修正した説を呂祖儉が送ったことに對する批評とみてよい。陳亮の事功の説をめぐる論議と内容的に重なるものはほとんどなく、論題としては朱熹が考える道学に近いものである。第二二、二四書は別として、それらは第二一書から連なるものである。この淳熙一、二二年だけをみると朱陳論争が前面に出るために、呂祖儉における「道学」というものに対する継続した関心が眼につきにくい、この関心が底流に一貫してあるゆえに呂祖儉は朱熹と交渉し続けているとみるのが自然であろう。

淳熙一二年のその後をみると、以上の書簡の後に置かれている短い第二七書は、時期が不詳のものだが、朱熹がみる所の「天理人欲の判を察す」る学と「功利權謀」とを對比させて前者に就くべきことを説き、陳亮批判の余韻が残る。經書の語をあげて道学主題の論議をすることはしない。文面のやはりごく短い第二八書は、その前提となる朱熹宛書簡で呂祖儉が言ったであろう「為学」の方法の言葉二件をとりあげて、「前の説に由れば、且らく目前の病を養うの計を為す可きも、学を為す所以に非ず。後の説に由れば、則ち惟だ義理に差有るのみならずして、亦た已に憊るるの精神を休養する所以に非ざるなり」と朱熹は説く。この「養病」「休養」という言葉は、第二六書の冒頭で「忽ち郭希呂の書を得て、嘗て感疾軽からずと聞く。甚だ以て慮と為す」と言っている病気に関わるものである(⑩)。ただしこの書簡はこれ以上には論題をあげた道学論議をすることはしない。

そして『朱集』の巻数が卷四八にかわる次の第二九書以下は、朱

陳論争期とは文脈が離れ、明州の任務が終わっておそらくは婺州金華に帰って講学しているときのものともみられる。このことについては第二節において先にふれた。その頃朱明の人に対しては、浙学が陳亮説に傾くと苦々しく漏らしているが(⑪)、これら第二九書以下には事功説への直接の批判はみえない。第二九、三三書の書簡を通じていえば、朱熹は呂祖儉の為学の姿勢に批判的にアドバイスするものの、彼が講学すること自体に対しては好意的な反応を示している(⑫)。

以上、道学主題についてどう論議されているかという眼で表Iの呂祖儉宛朱熹書簡第II群の淳熙一一年以降のものをたどった。全体を通して言うと、朱熹は説の齟齬については批判するが、書簡による講学の継続には積極的かつ好意的に応じている。論理的に論破しないと自説が立ちゆかなくなるとして論議の相手を全面対決の対象とみる陳亮批判や陸学批判における言葉づかいは、心的態度が異なる。そして呂祖儉の求めに応じつつそうした態度をとることにより結果的には呂祖儉を自説陣営に取り込むのに成功している。呂祖儉に即して言えば、呂祖儉はこの朱陳論争期を通して、はじめ陳亮説を尊奉していたらしいのに対し、後に朱熹説に接近する有様が、これら道学論議からはうかがえる。そしてそれは、科挙システムの中で道学を振興しようとした在世中の呂祖謙の主導のもとにその一翼を担う立場にあった朱熹が、その呂祖謙の死後、呂氏の学に對して相対的に主導権を握り自己の学説の学派的自立を実現していく過程、呂祖儉に即して言えば、科挙システムの中で道学を振興すると

いう呂氏の学が士大夫思想界において持っていた中心性が失われていく過程でもあった。

五 小結

本稿は、南宋半ばの科挙システム文化界で思想面でも文章の学の面でも重要な役割を果たした有名な呂祖謙の弟である呂祖僉と朱熹との交渉を、その兄の死による士大夫思想文化界の布置の変化を意識し、朱熹資料として大量に残る呂祖僉宛朱熹書簡を主たる資料としながら、追跡した。

最後に本稿冒頭で述べた呂祖謙の死の波紋に戻してその追跡を顧みると、朱熹におけるその交渉は、呂祖僉ひとりとの交渉ではないことに思い至る。本稿の本文、注を含めて言えば、そこには呂氏の学につながる人々、陸氏の学につながる人々がそれぞれ自己につながる線において論議を相互に共有しているのがうかがえた。書簡の往復というと一対一のもものとみなしがちであるがそうではなく、論議はネットワーク的にひろがりをもつ。ある中心思想家と他の中心思想家との間に書簡によるものも含めて講学がなされ、それがそのある中心思想家の門人、地縁・学縁関係者ら周辺の人士に伝えられ、その人士が右の他の思想家と直接に交渉したりしていることが窺い知られるのである。例えば呂祖謙につながる周介に対し朱熹は「呂陸の門人の門人互いに相い排斥す」と言っていたが（第三節の（二））、その裏には朱熹がそのように言うことになる話題を周介の方から語りかけていたことが予想できる。そしてこうした過程で各中心思想

家達は、他の中心思想家との差異を鮮明化することを余儀なくされる。出発は同じ士大夫思想としての北宋道学を継承しながら、冒頭でふれた広域講学の展開として、ここに学派的なものが形成されていくのである。

そうした状況の出現を促したのは呂祖謙の死であった。彼の死は、学派的なものが形成されていく以前の、科挙システムに寄りかかることよって成立した広域講学が、士大夫思想が分化し科挙にのみ寄りかかるのではなく学説的なものを核として広域レベルで交流するといった段階の広域講学に移っていく転換点であった。本稿でみた朱熹と呂祖僉との交渉は、このような過程を体现する現場の事例であったと言えることでもできるであろう。

注

- ① 拙稿「朱熹・呂祖謙講学試論」（宋代史研究会研究報告第六集『宋代社会のネットワーク』汲古書院、一九九八年）、参照。
- ② 「地域講学」と「広域講学」という考えについては拙稿「南宋朱陸論再考——浙東陸門表變を中心として——」（宋代史研究会研究報告第四集『宋代の知識人—思想・制度・地域社会』汲古書院、一九九三年）、参照。
- ③ 楊簡、孫応時、彭龜年らに祭文、奠辞があるが、事跡究明の新たな資料にはならない。
- ④ 呂氏兄弟との交渉に関するこの頃の朱熹の感情をうかがうと、「心説」論議における祖僉の説は朱熹の意に合わないものだったが、関連すると思われる兄呂祖謙宛のその頃の朱熹書簡で、「子約忠告、已奉報矣。不知何故如此猶予前却。比不該不敬之本。於進道中正是其大之病、須痛加治

療。熹書中已極言之。想從容之際、亦必有以警之也。」(『朱集』卷三三「呂伯恭」第三三書)と朱熹は言う。この表現全体は弟祖俊を格下にみており、また末尾の言はこの呂氏兄弟に相当に心許した言い方である。朱熹は四十四歳のときに二十一歳になった長男の塾を呂祖謙のもとで受講させるが、その六年後の呂祖謙宛の朱熹書簡第六四書で塾の教育にふれて、「塾必能略道之。或有未當、幸口授子約、細索面見教為望。」と言う。この口吻もやはり心許した言い方である。かつこれによると弟祖俊は朱塾と親しく塾より若干年長かとみられ、兄祖謙の意を体する力を持って塾を導いてくれる者として朱熹に信頼されているかのようである。またこの表現は呂祖俊の年齢が朱熹より十五〜二十歳前後若いという先の推測の傍証ともなる。

⑤ 第三一書は「九月十三日」と注記があるが、「丁未」とは言っていない。『易学啓蒙』に関わる話題が出るので、陳来書に従って『易学啓蒙』ができた年に置いたが、翌年という可能性も拒否はできない。

⑥ 明州の差遣時期については従来、「丁未」の年、すなわち淳熙一四年(一一八七)後半までとみられてきた。そのことを唱えるのは『宋元学案』本伝および全祖望『鮚埼亭集外編』卷四四「奉臨川先生帖子 五」である。全氏の一文は、『宋史』呂祖俊本伝の明州赴任に続く、「終更赴銓。丞相周必大語尚書尤表招之。」という記述の周必大の「丞相」時期を「丁未」と考証し、同時に、呂祖俊宛朱熹書簡第三四書に「対班在何時。」とみえるのがこの「赴銓」に対応すると考え、この第三四書に「十一月二十七日」とある注記を、その第三四書の前の第二九、三〇、三一書にそれぞれ「丁未五月十三日」「丁未七月三日」「九月十三日」とある題目注記から、「題注在丁未冬十一月」と述べてこの第三四書を「丁未」とみ

なし、これ以前まで呂祖俊が明州にいたと推測する。この考察だと少なくとも「丁未」の九月までは明州にいたことになる。近年の陳来氏も第三二、三三書の考証でこの『宋元学案』に拠り、呂祖俊は「丁未」まで明州で講学したとみる。(陳来書二四三頁)。ただし陳氏は第三四書については、本伝の「除司農簿。已而乞補外、通判台州。寧宗即位、除太府丞。」という記述とこの書簡中に「農簿の除」とあるのを突き合わせて、紹熙元年かややその前と推測し、翌淳熙一五年に置く(二七三頁)。

ところでこの第三四書について田中謙二「朱門弟子師事年攷」(『田中謙二著作集 第三卷』汲古書院、二〇〇一年)は、朱熹のもとに趙師夏、趙師那がいることをこの書簡が言うことに注目し、二人の同席時期を考察して、この書簡の年次を紹熙四年(朱熹六十四歳)とする(二〇六頁)。この説では第三四書は全祖望説より七年も遅いことになる。仮に明州にさらに七年いたとすると、明州赴任以後、第三四書がふれる本伝の「除司農簿」という、陳来氏が注目する記事までの間に本伝に別に「除籍田令」という記事があることも矛盾する。つまりは田中説に拠った場合、この第三四書は祖俊の明州離任期を推定する資料にはならず、ひいてはその前の「丁未」と題注がある書簡も、明州講学を保証する資料とみることはできなくなる。

そこでこの第三四書について検討しよう。趙師夏、趙師那の同席時期をみるべきという田中説の論点は後退できない問題提起なので、この説を補強する資料を求めると次のような資料があることがわかる。すなわち婺州の先賢を顕彰する資料を集めた元・呉師道「敬郷録」卷七「呂祖俊」の著述書目の項に、「癸丑封事・癸丑輪対」という記述がみえ、この「癸丑」がまさに紹熙四年である。すると本書簡中に「対班在何時」とある

のはこの「癸丑輪対」を指し、朱熹が書いた時点の朱熹にとつての情報としてはそれが間近だがまだ行われていないということになる。また陳来書が問題とした「司農簿に除せらる」という記事に続いて本伝は「通判台州」と述べる。これに関わるものとして彭龟年『止堂集』卷一六に「癸丑冬」として「送呂子約赴天台倅」詩がある。ただし「天台倅」と天台県丞ということになるが、これは台州の雅称として「天台」といったか。以上ふたつの材料を田中説と併せると、この第三四書は、やはり紹熙四年の末の十一月のものであり、この年の十一月か十二月に輪対があり、その時と通判の命が下った時との先後は不明ながら、直後にその外任に赴いたということになるか。本伝は明州赴任から「対班」までいくつかの記事をはさむので、呂祖儉がその時まで明州にいたとは思われない。明州離任時期は第三四書とは別に考えなければならない。

そこで『宋史』本伝を再読すると、先の周必大、尤表が招いたという記事の後に「祖儉已調衢州法曹而後往見。」とあるのをはさんで、「潘時てい経略広東、欲辟為属、祖儉辞。」という記事があることに気づく。『南宋制撫年表』によると、「潘時」ならぬ「潘時」が淳熙一一〜一四年に知広州となつてゐる。「潘時」はこの人であろう。潘時は婺州金華、つまり呂祖儉の本拠地と同地の人であり、張栻、呂祖謙とも交遊があり、またその子の潘友端、友恭は朱熹に師事した。その縁で朱熹は潘時の墓誌銘を書いている（『朱集』卷九四「直頭諱閣潘公墓誌銘」）。潘時が「辟し」たのは、时期的には本伝の前の、「已調衢州法曹而後往見」という記述のあと、すなわち「已に調せられ」て明州を離任した後であろう。それが潘時の広州赴任期にあたる。「辟す」るのが広州赴任の末年である一四年というのは不自然なので、「辟し」たのはそれよりも若干さかのぼるはずである。

「祖儉已調衢州法曹而後往見」という記述を本伝がはさむことからして、ひとまず淳熙一三年頃とみておきたい。なお、こう考えたと周必大の「丞相」というのは何かということになるが、これは知枢密院事（淳熙九年六月）。『宋史』卷二二三、宰輔表、枢密使（淳熙一一年六月〜一四年二月）時期を含んで言ったか。

ところで呂祖儉が「丁未」まで明州にいたことを前提にしないということになると、呂祖儉宛朱熹書簡の特に第二九〜三三書の内容をどうみるか、またこれらの書簡を受け取った呂祖儉はどこにいたのかがあらためて問われる。第二九書は先にふれたように表題原注に「丁未五月十三日」とあるが、その文面に「後來 講席に來依する者有り」というみえ、また第三一書に「講授亦た頗る勤勞す」、第三二書に「後生を訓導す」、第三三書に「示諭さるる授学の意は甚だ善し」といった句があり、祖儉が若い人士向けに講学し、その語り方の苦心や語ったことを朱熹に知らせていたということが推察できる。従来は淳熙一四年の後半までは呂祖儉は明州にいたとされることから、これらの書簡の記述はその明州で講学していた様子を伝えたものとみられていた。しかし右の考察のように、「丁未」には彼は明州を離れていたと思われ、これらの書簡を祖儉の明州講学を語るものとみることができない。そして「丁未」から第三四書の紹熙四年まではだいたい時がある。ではこの事態をどうみるべきかということになるが、これら第二九〜三三書の書簡を通じていえば呂祖儉が講学することそれ自体について朱熹は好意的な反応を示しており、論調としてこれらはおよそひとまとまりのものとして推察される。そして第三四書も朱熹の編著の話題とか、朱熹、呂祖儉両者の知人の話題とかで落ち着いた論調である。第三四書で呂祖儉が「対班」にあたるということからす

ると祖儉はその時は臨安に、もしくは祖儉の縁者、知人の話題が出てい
ることからすると婺州に、おそらくはいたはずである。そして蓋然性で
言うことになるので恐縮だが、この第三四書に先立ちかつ明州をすでに
離れていたとみられる時期の第二九〇三三書には、呂祖儉がやはり落ち
着いて講学している様子がうかがえることからすると、確証となる資料
はないが、そのとき祖儉は婺州に帰っており、その本拠地で講学したと
みるのが穏当ではないか。「丁未」と紹熙四年とのちょうど中間になる紹
熙元年夏に呂祖儉が婺州で講学していたことは、『朱集統集』巻一「答黃
直卿」二六に、「子約頗愛秦兒（朱熹の長男の朱塾のこと―市来）、已屬
令隨諸生程課、督察之矣。但婺州近日一種議論愈可惡、大抵名宗呂氏、
而実主同父。」とみえることからして確かである。この書簡の年次につい
ては陳来書三二三頁、参照。また呂祖謙『少儀外伝』末尾に紹熙二年七
月日付の呂祖儉後跋があるのも、こうした講学活動の一環とみることが
できる。呂祖儉宛書簡の巻数がこの第二九書で巻四八にかわるといふ『朱
集』の編集もこうみると説明がつく。表1の略年表の第II群部分の書簡
年次は、以上の考察によった。

⑦ 第三五書について陳来書は、第三七書が第三五、三六書を直接に前提と
しており、また第三七書中には「近來玉山所刻先生講説」と、紹熙五年
十一月のいわゆる玉山講義にふれる言葉があり且つ講義後まもないとみ
られることから、慶元元年（一一九五。朱熹六十六歳）とみる（三八一
頁）。ただしこの年のものだととしても流論といった切迫した雰囲気はみえ
ない。これら三通の書簡は呂祖儉が趙汝愚罷免に対して上書した四月よ
り以前のものかと思われる。

⑧ 本伝は、「在謫所、讀書窮理、完業以自給、每出必草屨徒步、為嶺嶺之

備。」という挿話を載せているが、いずれ嶺南へ送られるとみて心胆を鍛
えていたことをうかがわせる。

⑨ また『朱集』巻四九「答陳膚仲」第一書も、陸学のよい処はとるべきと
論ずる。陳膚仲は陳孔碩、福州信官の人の字。淳熙二年（一一七五）の
進士。張栻、呂祖謙に学ぶ。両者の死後、朱熹と交渉。

⑩ 劉清之、字は子澄、臨江軍清江の人、紹興二十七年（一一五七）の進士。
進士登第の後に博学宏詞科のエリートコースを志望したが、朱熹に会っ
て応募をやめて道学に向かったという（『宋史』卷四三七、「儒林 八」
劉清之伝）。鵝湖の会にも参加。また『小学』を朱熹とともに編集した。
劉清之宛朱熹書簡は隆興元年（一一六三）頃から始まる（『朱集』卷三
五、第一書）。彼に捧げた朱熹の祭文に、「切磋の益、歳晩に益ます親し
き。」（『朱集』卷八七）というが、劉清之は朱熹の親しき同調者ともい
べき人であった。

⑪ 東景南書五六二頁以下のほか、邦文では、庄子莊一「陳亮の学」（『東洋
の文化と社会』第四号、一九五四年）、「功利学派陳亮の『変通の理』に
ついて」（『入矢・小川教授退休記念中国文学語学論集』、一九七四年）、
吉原文昭「陳亮の人と生活」（『中央大学文学部紀要 哲学科』第二六号、
一九八〇年）、荒木見悟「南宋功利学派―陳龍川と葉水心―」（『中国思想
史の諸相』所収、一九八九年）等、参照。

⑫ 東景南書五六五頁は、陳亮が主観としては真の儒の学をめざしたことを
論じ、早坂俊広「陳亮の道学―『西銘説』を中心として―」（『日本中国
学会報』第四五集、一九九三年）は、陳亮思想の基底にある広義の「道
学」について分析する。

⑬ 「心説」問答に関連する朱熹書簡の関係を陳来論文をも参考にして示す

と、ほぼ次のような發送順になる。「」は踏まえているそれ以前の書簡。

それぞれの書簡の前提として各宛人からの朱熹への書簡があることが予想されるのはいうまでもない。□内の指示はその前提となるそれらの書簡も含むとみていただきたい。「答呂子約」第一〇書（『朱集』卷四七、

以下「朱集」は省略）↓「答呂子約」第一三書↓「答石子重」第三書（卷四二）「答呂子約」第一三書↓「答方伯謨」第六書（卷四四）↓「答呂子約」第一六書↓「答吳晦叔」第一二書（卷四二）「答石子重」第三書、「答呂子約」第一六書、「答方伯謨」第六書↓「答游誠之」第三書（卷四五）「答石子重」第三書、「答呂子約」第一六書↓「答呂子約」第一七書↓「答何叔京」第二五書（卷四〇）「答石子重」第三書、「答呂子約」第一七書、「答游誠之」第三書↓「答何叔京」第二六書。

⑭ 注①拙稿「朱熹・呂祖謙講学試論」、参照。

⑮ 東景南書五八三頁は、この第二八書を淳熙一三年のものとして、そこにみえる祖儉の「省節視聽」の語を、「又暴露了他思想深處別一種因好仏説而与陸氏心学趣同的傾向。」とみて陸学への接近ととり、氏の論旨に関わる重要資料とみる。しかしこの語はその文脈からすると、病氣療養に関わるものとする陳來說が妥当であると考える。

⑯ 注⑤末尾の黄榦宛書簡の一節、参照。

⑰ ここで東景南書における朱熹・呂祖儉交渉の理解について一言ふれておきたい。東氏は、呂祖儉像の表象といふことでは、陸学と禪家静坐の工夫とを同一視した上で、呂祖儉が陸学と事功の学を折衷させようとしたという視点で晩年の祖儉と朱熹との「未発」論議を捉えようとし（八一四〜三頁）、その前段階として第二八書に心学に向かうきざしをみてとる（五八三頁）。明州赴任期に浙東陸門の沈煥らと親しく交流したこと、

潘景憲のように呂門の中に仏教傾倒者が出てくることなどに基づいてこのようにみる。しかし個別の仏教有傾倒は個人に即してみるべきである。晩年の未発論議にふれることはここではひかえたいが、その未発問題はもと第三六書にはじまり、続く三七書問目所引呂祖儉書簡で祖儉は先にみたように仏教批判を行っている。そもそも朱熹は呂祖儉に対し穿鑿を戒めることをいつも言う。つまり祖儉は細かい考証にとらわれすぎると朱熹にはみえており、そこにある像は祖儉における陸学への接近と

いうこととはむしろ逆である。淳熙一二年段階の呂祖儉宛朱熹書簡は、以上にみたように陳亮説批判に関わる言説と道学論議との二本立てで書かれているが、その道学論議部分にも陸学に趨ることを警戒するような内容はない。本稿でみたようにその部分の経緯をたどると、呂祖儉はあたかも朱熹の説得により朱熹に近い講学者となったかのようなのである。しかし東氏はこの道学論議部分について論及はしない。東氏の論は、緻密な考証の上で陳亮説、陸学、呂氏の学それぞれ同士、またこれらのそれぞれと朱熹との総合的相関関係の中で朱熹の営為を読み解くすぐれた論述を展開しているのではあるが、陸学的要素への志向を祖儉の中に読み込むというのには、朱説に対する呂祖儉の持続する関心を想定した場合、無理があると思われる。

本稿は、平成十一〜十三年度科研究費補助金（基盤研究（C）（2））「南宋中期における士大夫思想交流の基礎的研究」（代表・個人）、及び平成十三〜十六年度科研究費補助金（基盤研究（B）（1））「宋代士大夫の相互性と日常空間に関する思想文化的研究」（分担）による研究成果の一部である。